

ヤンゴン素描 5 お屋敷町・ダゴン町 山形洋一

保健省の統計（2009年）によれば、ダゴン町の人口密度は1平方キロメートルあたり4575人と、南に隣接した商業地区の10分の1に満たない。ヤンゴン管区45タウンシップのうち28位。市街地にありながら、郊外なみに人口稀薄だ。

その理由のひとつは、町の北半分がシュエダゴンパゴダや、ピープルズパーク、旧国会議事堂などで占められて、事実上無人になっていることだが、南半分を占める住宅地もまた、官舎や各国大使館など豪邸が主で、贅沢に敷地をとっている。日本人学校もそうした邸宅のひとつに数えてよいだろう。

生活臭に乏しく、やや取り澄ました町ではあるが、異なる様式の建物を見比べたり、手入れの行き届いた庭を文字通り垣間見たりするには面白い。

古い建物の中で一番質素なのは、インドや旧英領アフリカでよく見かける「バンガロー」（ベンガルの民家を模した官舎）である。積み木を重ねたようなずんぐりむっくりで、天井が高く、軒が深く、窓には網戸がはめられてあることが多い。屋根は寄棟もしくは切妻、赤い瓦が標準のようなのだが、苔むすと冴えない。平屋もあるが、ダゴン町では二階建てが多く、ポーチの下は車止めになっている。



これ似てやや構えの大きなものを、私は勝手に「シャレー」(山荘)と呼んでいる。

屋根は勾配の大きな入母屋で、白壁の表面に梁や柱を浮き出させ、屋根、窓ガラス、木材、白壁の色のコントラストを見せている。

湿潤アジアと西欧を掛け合わせたようなデザインで、パキスタンやマレーシアなどの大使館にも採用されている。グーグルで真上から見た形もちょっと入り組んでいて面白い。

アロン通りの南に面して、廃墟となりかけた古い「山荘」もあるので、とり壊されないうちに見ておかれることをお勧めする(図1)。

「山荘」よりも贅沢なのを、「宮殿型」と呼んでいる。

その一つが、アロン通りとピー通りの交差点の南西にある「シャトー・ド・リオン」(獅子城)だ(図2)。ギリシャ風の円柱の柱頭はイオニア式の渦巻きとコリント式のアカンサスの葉を重ね、切妻の三角形のフリーズには金色のライオンの頭部がついている。

上から見ると四角形の母屋に、八角形柱が乗る。ドーム基部から八方に張り出した馬蹄形の装飾は、バガンの洞窟型寺院型。元はインドの石窟寺院のデザインで、日本では築地本願寺に採用されている。おまけに鉄の門はロココ風と、好きなものを何でも取り入れて、悪趣味に墮する一歩手前で、うまくまとめている。

朝夕の日光が斜めからの当たるときが見ごろだ。

ダゴン町はヤンゴン市街地でもっとも高く、西のチミンダインからの攻撃に備えて、軍事基地となったようだ。

下町に比べればゆったり間隔をとった直線道路は、見通しがよい。東西南北の軸から左に15度ほどねじれているので、道路の西は約255度を向く。2月3日の「節分」と、11月3日「文化の日」のころ、道路のまっすぐ向こうに夕日が落ちる。

